



# 昭和短歌史

木俣 修著

明治書院

著者略歴

明治三十九年七月二十八日、滋賀県に生れる。昭和女子大学教授・日本近代文学館常任理事。昭和初頭より歌人として活躍、短歌雑誌『形成』主宰。

主なる著書

歌集『市路の果』『みちのく』『高志』『流砂』『冬曆』『落葉の章』『歯車』『天に群星』『呼ばば鈴』その他。  
研究書・評論集『白秋研究』二卷『近代短歌の諸問題』『人間と短歌』『近代歌人群像』『近代短歌』『明治秀歌』『短歌のあらまし』『近代短歌の鑑賞と批評』『わらべ唄歳時記』『実朝物語』『吉井勇—人と文学—』他十数冊。編纂ものに『近代短歌辞典』『万葉集講座』『和歌文学大辞典』『現代作歌用語辞典』『現代文学講座』『現代日本文学大事典』その他。

昭和短歌史

昭和三十九年十月五日 初版発行  
昭和四十一年一月二十五日 再版発行

¥ 2,300

著者 東京都杉並区上高井台三ノ五五五 木俣 修  
発行者 文入 宗 義  
印刷者 竹内 勝 之

発行所 株式会社 明治書院  
東京都千代田区神田錦町一の十六  
電話 東京 (294) 五三三六 (代)  
振替口座・東京 四九九一番

## はしがき

日中事変・太平洋戦争と長い歳月にわたる戦争によって人間的な精神はふみにじられ、そのことによつて真の意味の文学は全く息の根をとめられてしまふというような事態にたち至つたのであつたが、戦争の終結によつて、ようやく人間の自由は恢復され、人間的な精神を精神として生きることのよろこびを味わうことができようになつた。そして人間の文学は徐々に息を吹きかえしはじめたのであつた。

戦意昂揚のための用を弁ずる役割を担うことを使命とすべく余儀なくされていた短歌も、その桎梏から解放されて、新しい変化が見られるような日がやつてきた。私は一作者として、今こそ歌人はこの世紀の惨禍をふまえて人間として人間的な精神にみちみちた歌を作るべく奮起しなければならないというような考えに立つて、作品実践にはげむと同時に、歌論をも書きつづけた。そしてまたこの機に近代短歌の歴史を新しい眼によつて展望するような仕事もしてみたという欲求に駆られたのであつた。昭和二十五年、ある書肆の依頼をうけて簡単な近代短歌通史を執筆上刊したのを手はじめに、いくつかそれに類したものを書いたのであつたが、私の詳細に書きたいと思つていたのは、もつとも時代の近い昭和の短歌史であつた。

私が短歌の世界に入ったのは大正の末年ごろであつた。したがつて昭和の短歌のあるいは歌壇の歴史的な展

開消長というものは歌壇の一員として、身をもって見聞してきたところである。そこでそうした実際の見聞をもとにして自由きままな短歌史を時間をかけて書いてみたいと思ったわけであった。

幸なことに、私は戦災をうけなかったので、架蔵の昭和初頭からの短歌および歌壇に関する諸資料を失うことがなかった。贈をうけたり、購読したりしたのは片々たるものでも保存されていたので、資料は大体そろっているという目安もあった。昭和初頭のプロレタリア短歌、あるいはひろく新興短歌といったようなものに関する雑誌や単行本はその当時発禁処分をうけたものが多かったので、その発行所や著者などの手許にはなっていないむきが多いにもかかわらず、寄贈をうけた私の手許にはそれらのものが残っているといったことなどもあった。そしてそうしたものが、焼けなかったわけだから、それらを踏まえて、自らの身に直接感じてきたもので肉付けをしていけば何か書けそうだという気がしていたのである。

しかしそうこうしているうちに十年ほどの歳月が経ってしまったのだが、昭和三十一年の冬ごろ、たまたま雑誌『短歌研究』から何か長篇の連載物を書いてほしいという注文があった。そこで、それに応じていよいよ「昭和短歌史」を書くことに決めたのであった。

その雑誌の三十二年の新年号に「序章」を書いて以来、何回かの休載もあったが、ともかくも延々と書きつづけ、三十七年の十一月号に至った。そしてそこでひとまずの終稿としたのであった。

六年間の長期にわたっての執筆のことであるために、最初の大体の見通しを途中で変更しなければならなくなったり、繁簡の操作が不充分だったり、あるいはまた資料の扱い方、項目の立て方の上に不備があったりし

て整然としたものとならなかつたらうらみがあることを書き終つて痛感しなければならなかつた。

書きはじめたころ、文芸評論家の瀬沼茂樹氏が『短歌研究』(昭和三十一年六月号)に『昭和短歌史』への期待」という題で次のような激励を与える文章を書いてくれた。

木俣修氏が本誌に連載中の『昭和短歌史』は、すでに六回になっているが、まだ始まつたばかりという感じが深い。序章から、ようやく「大正十五年という年」の章を終え、「既成歌壇に挑むもの」の章に入ったところである。記述の進行の仕方からいえば、昭和三十年の短歌の歴史を書きつくすには、数年を要するかもしれない。近頃、木俣氏に会う機会もなく、直接にも聞いているわけではないから、同氏の抱負のほどを知らないが、まさにライフ・ワークとして、白秋研究などと平行して取りかかれた大業のようである。

小泉菱三の『近代短歌史（明治篇）』とか、斎藤茂吉の『明治大正短歌史』とか、近頃までに近代短歌史の学問的研究も少くないが、昭和短歌史は学問的には未開拓の処女地で、それだけに最初に歎をいれる困難と同時に榮譽を担われるもので、ぼくのように昭和文学史に強い関心をもっているものにとっては、大いに期待される大事業といつてよからう。ぼくは何よりも、この大事業の恙のない完成を期待するとともに祈りたい。昭和文学という規定が文学史として一種の実質的な意味をもつとすれば、それは何であるか、ということ、すこしでも昭和文学史を考えるもののみならず初めに考えなければならぬところであらう。明治、大正、昭和という年号は、歴史の実質的な進展については、必ずしもこれを限定する意味をもたぬ外的な記号にす

ぎない。大正文学とか、昭和文学とかを考えるとすれば、それは必ずしも年号による年間を意味しないで、もう少し融通のあるとりかたをしなければなるまい。大正文学の起点を、明治四三年の『白樺』や『スバル』の発刊に置き、昭和文学を大正一三年の『文芸時代』などの発刊に置く考えかたの根本には、そういう実質的な意味づけがある。かつて平田次三郎が『昭和文学研究』（塙書房刊）でこれを論じた意味もそこにあるだろう。ぼくは、かつて『昭和の文学』で新感覺派の抬頭にそのメルクマアルをみたのも、同じである。それで角川文庫版『昭和文学史』で、久保田正文が昭和の短歌の起点に大正十三年四月の『日光』の創刊を置き、そこから記述をすゝめたことに、偶然以上のものを認めないわけにいかず、ぼくの大きな関心をひいた。木俣氏もまた形式上「大正十五年という年」を問題にしなから、実質上『日光』の創刊に昭和短歌の開幕をみとめていることは、そこに新たな試みを含めつつも、正統なふみ出しかただと思ふ。

ぼくは、いま詳細な批評めいた言辭を、木俣氏の大業に挟むことは、著者には大変迷惑なことだということを知っている。下世話にも、仕事は粒々仕上げを御覧じろといっているではないか。したがって、それは完成を俟つてのことにするが、それにしても、勿論、お世辭を並べることが期待なのではあるまい。ぼくの期待するところは、木俣氏が「序章」に述べているような意図を貫徹されることであろうと思ふし、それに木俣氏になら見事やりぬくにちがいないというところである。

木俣氏は歌人だし、自ら『形成』を主宰している。だから結社や歌壇の人であって、そこによく通じていることは言を俟たない。同時に木俣氏は学者である。おそらく、『昭和短歌史』は、歌人としての短歌のす

ぐれた鑑賞を武器として、これを文学史的に編むことがこの短歌史の大きな野心なのではないかと思う。「序章」は、短歌が「近代日本文学史」のなかで大きな役割をもっていたことを追憶しながら、歌人の「文壇からの放逐」が「歌壇」をなした大正期について、むしろ慨嘆している。歌壇が「特殊国になってしまふ」ことは、「文壇からの離脱」ということが重大なのではなく、芸術からの文学からの転落が問題なのであろう。「歴史の意味をもった歌人が何ほど出現したか」という問いはその裏返しでの強調なのではないかと、ぼくは見ている。ぼくは、木俣氏が「文学史家の眼」で、昭和短歌の歴史をみようとしている決意をそこに読むのだが、まちがっているであらうか。ぼくの期待はそこにある。

木俣氏は、齋藤茂吉が『明治大正短歌史』のなかで、「茂吉は明治末期から大正初期にかけての期間より大正期の方が歌壇の短歌作品は円熟し、優秀な歌人が出ていっている」と要約し「まさに私の所論とは逆である」と論じている。ぼくの見解も木俣氏と同じで、茂吉の考えかたは結社の「僻見」だと考えるし、非文学的、非芸術的見解だと思う。短歌史を歌人中心に、結社中心にみるときに生まれる非歴史の見解というべきであらう。ぼくは木俣氏が、茂吉の見解とまさに反対であるところに、文学史としての短歌論は成立するのであり、歌論における文学思潮の方向、作品における歴史の意味の方向こそ、その内容を決定するものであらう。

このようにみてくると、木俣氏の決意は、表現の「歌壇」的である側面に、脈うっているように思う。ぼくは、この決意こそ、歌壇的現象を裁断して、そこに芸術の歴史をあむものであらうと思う。おそら



く、結社の歌人でもある木俣氏としては、或る意味では、自己への叛逆をも含まねばならぬ部面に出あうかもしれない。また木俣氏の師である北原白秋にも叛かなければならぬことがおこるであろう。前に茂吉がいったことと反対の見解にあると表明した木俣氏は、白秋の晩年の「円熟」をどう扱うかという苦しい場面を考えなければなるまい。ほくは、そこに氏の勇氣と決意とを、期待したい。木俣氏よ、ほくたちも、ほくたちの「円熟」に叛逆することにおいて、初めてライフ・ワークをして有終の美にもたらずことを、文学者として覚悟しなければならぬものであると知っている。

私はこの同情にみちた温い激励に感謝したが、同時にそのような期待に添えるかどうかということをおぼろげな危ぶみ、かつおそれないではいられなかった。そして遂にその激励に答えることのできなかったのではなかったかと反省している次第である。

さらにまた評論家であり、歌人として昭和初頭新興歌壇に大きな問題を投げた大熊信行氏はやはり同じ雑誌の三十三年新年号に編集者の注文にこたえて「日本文学史のために」という一文を書いてくれた。それは次のような示唆に富んだものであった。

木俣氏が一九五七年一月号の本誌から連載中の「昭和短歌史」について、期待を述べるといふことなどで、ペンをとる。この仕事は編集者と作者の合作でなければならぬだけでなく、作者と読者との合作でも

なければならぬと思う。作者はこの短歌史に、ライフ・ワークとしての準備も意気込みで取組んでいるのであろうが、誌上連載のものは、一種の下書または一次的な草稿に類するものとみてよい。というのはこれは欧米の学界でいうディスカッション・ペーパーに当るといふことであつて、多くの人がこれを読んで、氣のついたことを注意し、間違つてゐるところを指摘し、脱落を補足するというな、いろいろの助力をあたえることができ、そして作者は、それにもとづいて完成稿に到達することができるだらう、という意味である。

木俣氏の「昭和短歌史」が、編集者との合作でなければならぬというのは、ときにはそういう機会を用意しなければならぬという意味もある。が、長期にわたる仕事であるから、編集方針としてあくまでこれを持続させる熱意が必要である。

現在まで拝見したところで氣のつくことは、昭和初頭のイデオロギー論争が、関係文献の引用にも、惜まらずスペースをさいて、克明に記述されているのに引きかえ、当時の新しい歌論の諸様相が、全然無視されていることである。ひよつとすると、自分の見おとした第八回で、それが取扱われているのかもしれないが、いづれにしても「昭和短歌史」は、「昭和短歌史」である以上に、ほんとうの短歌史でなければならず、それはまた日本文学史の文脈において捉えられなければならないはずのものであるから、完成稿においては、短歌史を歌論と作品の両面において統一的に捉えるという方法の確立を期待したい。

わたしは短歌を、近代文学の一形態として考える立場から出発したもので、その根底にあるものは、一個人の間であると信じている。ところが昭和初頭のイデオロギー論争には、人間そのものが脱け落ちており、

論争と人間とは別々のものとして無責任に存在し、それがそのまま戦後の今日におよんでいる。木俣氏の「昭和短歌史」には、そのような視角もなくはなるまいと思うが、これについては別に論じたい。また、瀬沼茂樹氏が木俣氏の今度の仕事について述べている期待と懸念については、まったく同感であることをいとおとすわけにいかない。考えてみると、氏はほんとうにいい仕事に取り組んだものだ。危険をおかさずに、大きな仕事はできまいと思うが、わたしは心から氏の成功を祈ってやまないものの一人である。

私の論考はかえりみて、またこの大熊氏の期待にもあるいは応じられないままに終わったとも思う。所詮は氏のいう下書の域を脱することができなかったかも知れないのである。

その他、時々の時評やあるいは年鑑風のものの上で多くの人々が激励を与えてくれた。一々ここに記すことはできないが、それらの人々に感謝をしたいと思う。

終稿後不備を整え、遺漏を補充しなどしたいと思っていたが、その機を得ないままに一年以上の歳月が流れた。しかし一本にまとめることをすすめてくれる多くの人々の要望に早く応えなければならぬという事情のため、この際、一応原型のままを上刊することに決め、かねがねから上刊の申し入れのあった明治書院の懇切にまつことにしたのである。連載物としての執筆のゆえに間々記述の重複するような箇所があったりしていたところを削除したり、あるいは作品例などを増補したりしたところや詞句の訂正をした箇所はあるが、基本的な論述は変更されていない。章名や小見出しなども、改めたいと思うところがないでもなかったが、私の愛着

からそれらも大体もとのままにしておいた。

私は私なりにともかくも六年間これを書きつづけるについて、かなりの努力をはらい、苦勞したのであってみれば、今こうして一本として広く世に問うことのできるようになったことはうれいことである。

短歌そのものに興味を持たない人々に読まれても、短歌を中心とした一種の昭和史としての興味がないことはないのだろうと思っている。またかなり老大な資料を扱っているから、将来こうした史的記述をする人々のために参考になる面もあるだろうとも思われる。私自身もさらに暇を得て加筆増補の機を得たいと思つてゐる。

巻末に手稿の年表を入れた。かつて明治書院版の『和歌文学大辞典』の付録の和歌史年表にも使用したことがあるが、改めて若干の加筆をして本書の記述の範囲である昭和元年から同二十八年までの分を収め、読者の参考に加することにしたのである。

索引は(一)人名(二)単行本・雑誌・新聞・論文(三)事項と三部に分けて比較的詳細なものを作成した。

校正・索引作成などについて書院の三樹達生・鈴木正五・小林登美恵の諸氏の助力をうけたことを感謝する。

昭和三十九年盛夏、東京杉並上高井戸風鳥居にて

木俣 修しるす

目次

はしがき	1
序章 — 大正から昭和へ	1
第一章 大正十五年という年	10
大正十五年の歌壇事象大観	10
『アララギ』と『日光』	11
赤彦の死	12
「短歌は滅亡せざるか」	13
「歌の円寂する時」	13
歌壇を構成していた歌人と作品	14
第二章 既成歌壇に挑むもの	15
口語短歌運動	15
昭和初頭の文壇情勢	16
プロレタリア短歌	16
「アララギの反動化」論争	17
『潮音』への批判	17
第三章 新興短歌の諸問題——昭和三年から五年にかけて——	18
生活派・自由律論者・近代主義への批判	18

新興歌人聯盟……………	101
用語と形式の問題……………	102
『プロレタリア短歌集』……………	102
プロレタリア歌人同盟……………	103
『短歌前衛』……………	110
プロレタリア歌人たちの歌集……………	110
プロレタリア短歌運動による結社の動搖……………	116
『短歌前衛』の終刊と『プロレタリア短歌』の創刊……………	119
『まるめら』の動き……………	124
近代主義短歌……………	124
新芸術派短歌……………	124
第四章 伝統短歌の様相——昭和五年ごろ——……………	126
伝統歌人の業績……………	126
結社雑誌の様相……………	127
飛翔詠の投げた問題……………	128
水穂と茂吉との「病雁」論争……………	129
第五章 昭和六年から十年まで……………	136
満洲事変前後……………	136
プロレタリア短歌のその後……………	139
プロレタリア短歌その後(補遺)……………	139

第六章 昭和十年代前期

伝統短歌の様相	二五〇
綜合雑誌の興亡	二六九
伝統歌壇の動搖変化	二七九
近代主義短歌その後	二八三
昭和十年代前期	三三三
昭和十年代前期の文学の見わたし	三三三
定型短歌散文化傾向の問題	三七七
『多磨』の創刊	三三四
歌壇一般の大勢	三三六
事変と歌人の覚悟	三四四
二・二六事件と歌壇	三六〇
旧派化を救え	三六八
「旧派化を救へ」の反響と行方	三七七
プロレタリア短歌の終焉	三八二
新短歌の動き	三九三
新短歌作品の定型復帰	四〇四
『新万葉集』の完成	四二二
『支那事変歌集・戦地篇』	四二六
『支那事変歌集・銃後篇』	四二六
紀元二千六百年と「新体制」	四三六

大日本歌人協会の解散	四五六
短歌報国	四六三
中堅新人層の抬頭	四六五
第七章 昭和十年代後期	四七九
太平洋戦争の開始	四七九
文学報国	四八一
ジャーナリズムに対する重圧	四八三
国民文学	四八五
「歴史的瞬間」における歌人歌壇の実態	四八七
戦争讃歌の氾濫	四九三
戦争短歌論	五〇三
日本文学報国会短歌部会	五〇五
晶子・白秋らの死	五一四
昭和十八年	五一八
撃ちてし止まむ	五二〇
『大東亜戦争歌集』	五二九
昭和十九年	五三七
歌壇の動き	五三六
雑誌の整備統合	五五〇
十九年歳晚	五五三



第八章 昭和二十年敗戦の前後……………五五八

無条件降伏の年……………五五八

激化する空襲下の歌壇……………五五八

作品の実態……………五五八

八月十五日……………五六三

歌壇の復活……………五六八

敗戦の歌ごえ……………五七〇

民主主義文学の発足……………五七一

第九章 昭和二十一年……………五六四

占領下の蕩揺……………五六四

『人民短歌』創刊……………五六六

第二芸術論……………五九六

短歌に対する否定的な批判……………六〇〇

俳句・短歌否定論の論拠……………六〇三

『短歌雑誌八雲』の創刊……………六一二

第十章 短歌否定論と歌人たちの動き……………六一四

否定論の展開……………六一四

歌人たちはどううけとったか……………六一九

局外の人々の批判……………六二〇